

第9章 本県農協の広報活動

農協教育の媒体機能として広報が重要視され、農協の対内・対外活動に広報が活躍するようになったのは、農協有線放送が設置されてからである。それ以前は、『家の光』、『地上』、『日本農業新聞』、農協機関紙、ラジオ番組の提供が農協教育広報活動の一環として行なわれていた。

有放が、農協の重要な広報機能を果たすようになってからは、教育から広報が分離して、そのなかに、機関紙（誌）、有放、農協文庫、スライド、映画、掲示板、ポスター、チラシ、広報車、「日本農業新聞」、「家の光」、「こどもの光」、「地上」などを包含することとなった。このことが明確化したのは、昭和43年に中央会が「山形県農協教育広報活動要領」を設定してからである。

1) 農協教育・農協事業に音の尖兵として活躍した有放

新農村建設イコール有放施設といわれながらも、農村のなかに農民自らの情報施設としての農協有放が設置されるようになったことは画期的なことであった。テレビ、電話などの電波通信が今日ほど普及しなかった時代の有放の果たした役割はめざましいものであった。

昭和36年には、本県農協の有放施設、受益組合員戸数はおよそ全県の3割に達し、東北随一の発展ぶりを示した。それだけに、解決すべき課題も多く附随した。固定資産課税問題、公社電話との接続問題、施設に対する国庫補助及び融資問題、料金問題、アナウンス・交換手・保守資格基準・待遇・勤務問題等をかかえながら、庄内では庄内農協有放協議会、内陸では内陸農協有放協議会を設置して精力的に課題解決に取り組んだ。

農協有放は、農協教育、農政、農協事業、農業生産、生活における音の尖兵として活躍しただけでなく、災害緊急対策あるいは人命救助などにも大きな役割を果たし、役場、学校、公民館などの公共活動の一翼をも担った。昭和44年度には、有放施設農協40、加入者6万戸をかぞえ、全県のおおむね6割の普及に達した。

有放事業は、通話・交換のほか、中央会・連合会等から次々に送られてくる放送原稿、テープ、ソノシートを活用するばかりでなく、単協独自の「自主番組」「告知」を創作開発し、組合員に知らせ、訴えてたゆまぬ組合員意識の結集と情報の提供に寄与した。

昭和45年まで13年あまり続いた県連提供のYBCラジオ「組合員のみなさんへ」の番組（毎週月～土、午前6～6.10）は、全農家に親しまれ活用され、本県農協広報史に輝やく大きな足跡を残した。

昭和39年5月、中央会はテレビとラジオの視聴率および有放に期待する番組に関して調査を行なった。調査対象農家は350人、回収率は48%であった（表Ⅲ-92-①～③参照）。また表Ⅲ-93は、農協番組の一例として取り上げたものである。

有線放送研修会（例）

45.9.29 地区担当者研修会—アナウンス表現技術について（NHK 山形、吉川アナウンサー）。

46.5.26～27 新採アナウンス研修会—アナウンス技術の基本について（YBC 放送部、芥川晴雄）。農協広報の役割について（中央会、後藤耿）。

47.3.1～2 放送担当者研修会—アナウンス放送原稿の作成について（中央会・高村健一）。設計図面の書き方

表III-92 テレビとラジオに関する調査

① テレビ・ラジオのどちらを主にき(見)きますか 単位: %

ラジオだけ	テレビだけ	両方	解答なし	計
7.1	53.0	39.3	9.6	100

② 有線放送ではどんな番組をのぞみますか

	農事放送	農産物市況	農政経済	教養・文化	生活改善	ニュース	娯楽番組	村内ニュース	計
男	28.6	10.9	12.2	8.1	10.2	10.9	10.2	8.8	100
女	21.9	2.9	5.7	13.3	21.0	10.5	7.6	17.1	100
計	25.8	7.5	9.5	10.3	14.7	10.7	9.1	12.4	100

③ 「組合員のみなさんへ」をきいていますか

項目	全 県		
	男	女	計
きいている	44.1	42.7	43.5
きいていない	37.6	36.0	36.9
知らなかった	8.6	13.3	10.7
解答なし	9.7	8.0	8.9
計	100	100	100

「内容はどうですか」

項目	計		
	男	女	計
ためになる	90.2	64.7	80.0
つまらない	2.4	6.5	2.7
やめてもいい	2.4	—	1.3
解答なし	5.0	28.8	15.2
計	100	100	100

(有放設計事務所, 島二郎)。

有放といい, ラジオ・広報車活動といい放送の第一線に立った農協の人たちは, 音の名優でもあった。全県の農協有放を組織だて, 有放の基盤づくりの陰役者となった中央会・連合会, NHK, YBC, 県の関係者の努力もまた見のがすことのできない存在であった。

<県外で表彰された農協と人>

県内関係の表彰は掲載しきれないので, 全国・東北大会で表彰された分のみを次に掲載する。

「日本農事放送10周年記念祝賀式典」40年5月27日・東京

農林大臣表彰—豊田農協

“ 感謝状—神町・山口・出羽農協

“ 感謝状—押野豊太

記念会会長表彰—大山農協ほか24農協

「東北有放施設者大会」39年10月30日・秋田

功労者表彰—安孫子芳尾

人命救助表彰—白鷹農協

「有放電話法施行15周年記念式典」47年7月27日・東京

功績功労表彰—佐藤喜一(鶴岡), 佐久間昭(朝日), 高橋昇(川西)

永続勤続表彰—武田(神町), 佐藤(朝日), 小山田(神町), 小野(鶴岡), 大館(朝日), 菅原(朝日),

加藤(楡引), 工藤(豊田)

〔山形県農事放送連絡協議会の発足〕 庄内と内陸に分かれて発足し事業を行ってきた両協議会は, 45年度に県一本に統合し, 山形県農事放送連絡協議会となった(会長・高橋伝, 蔵王)。

表Ⅲ-93 〔例〕 YBC 農協番組 3月放送予定表 (昭和39年)

「組合員のみなさんへ」

放送時間 AM 6時00～6時10分

日	曜	テ	マ	担当組合	担当者	備考
1	月	対談・今月の肉豚相場		庄内経済連	金須田庄也宏	畜産課長
2	火	子供のしあわせのために		県共連	北山利三	普及課長
3	水	リンゴの販売をかえりみて		県青果連	松田満天精	販売課長 東京駐在員
4	木	温床紙について		県経済連	渋谷勝太郎	生産資材課主任
5	金	もめる医療問題		県信連	伊藤省三	推進課
6	土	コント「一郎さん一家」		県経済連	みのりグループ	
7	日					
8	月	対談・これからの水稻集団栽培		庄内経済連	山口作次郎 須田宏	企画監理室課長
9	火	農協共済からみた農村の病気		県共連	喜早隆夫	事務課長
10	水	対談・養蚕の規模拡大について		県養蚕連	沼沢辰雄 鈴木辰雄	県蚕糸課長 農事課長
11	木	ダンボールの包装		県経済連	中田悌三	農林課
12	金	貯金倍化運動のはなし		県信連	豊田久太郎	調査役
13	土	クミアイの石鹸		県経済連	石沢秀夫	生活資材課
14	日					
15	月	今年の稲作はこんな点に注意を		庄内経済連	滝沢洗	県農試庄内分場長
16	火	クルマのある暮らしを楽しくするために		県共連	菅野喜恵	短期共済課長
17	水	青果連だより		県青果連	神保峯市	指導課長
18	木	豚の衛生管理		県経済連	工藤武雄	酪農畜産課
19	金	公表された農業白書		県信連	土田允彦	推進課
20	土	天気予報と施肥		県経済連	飛塚信一郎	肥飼料課
21	日					
22	月	対談・仔豚の価格補償制度について		庄内経済連	菅原正春 須田宏	畜産課長
23	火	また有利になった生命共済		県共連	枝松昭雄	普及課長
24	水	青果連だより		県青果連	竹田博吉	業務部長
25	木	食糧事情		県経済連	鹿野雅男	食糧課
26	金	不時の出費に備えるために		県信連	加藤久男	調査役
27	土	対談・4月の庄内柿の管理		庄内経済連	中須村助 須田宏	農産課 総務課
28	日					
29	月	庄内経済連だより		庄内経済連	須田宏	総務課
30	火	県共連だより		県共連	北山利三	普及課長
31	水	青果連だより		県青果連	田中武	資材係長

昭和49年度の本県農協有放施設の現況—施設農協名と(加入戸数)

山形(7,801), 本沢(722), 蔵王(1,011), 上山西郷(3,034), 天童市(5,378), 豊田(1,636), 山辺町(2,154), 寒河江市(1,152), 西根(919), 柴橋(917), 高松(1,775), 左沢(293), 大谷(551), 宮宿(763), 河北町(2,699), 村山市(3,550), 東根市(885), 神町(641), 東郷(1,159), 小田島(698), 長瀬(590), 新庄市(820), 米沢市(820), 高島町(4,466), 屋代(930), 川西町(821), 飯豊町(2,036), 鶴岡市(410), 羽黒町(1,657), 榊町(1,684), 朝日(1,559), 合計31農協(県下農協数 83), 加入戸数5万3,644戸。

2) 技を磨き覇を競ったアナウンス・番組コンクール

有放コンクールは、教育の場でもあり競争の場でもあった。出場者は、日ごろ鍛えた腕まえを発

表Ⅲ-94 東北・全国コンクールで活躍した有放アナウンサーと農協

実施年	場所	種 目	内 容
昭36年	東京	番組・コン	豊田農協「果樹だより」全国大会出場, 佳作入選
37	仙台	アン・コン	新庄市農協・大庭比佐子, 横山農協・瀬尾澄, 東北大会出場
		番組・コン	神町農協「開拓者の生活記録」東北大会出場, 第1位入賞
38	仙台	アナ・コン	豊田農協・佐藤喜江子, 東北大会出場 黄金農協・佐藤艶子, 東北大会で放送技術賞
		アナ・コン	山口農協・大山啓子, 田川農協・武田安, 東北大会出場
40	仙台	アナ・コン	山辺農協・長岡みよ子, 東郷農協・杉山孝子, 東北大会出場
		番組・コン	東金井農協「リンゴニュース」東北大会で優秀賞
41	仙台	番組・コン	山形農協「ブドウの市況と出荷」東北大会で優秀賞
	東京	アナ・コン	三川村農協・杉山孝子, 全国大会出場
42	仙台	番組・コン	豊田農協「安値をつづける桃」東北大会出場
	東京	アナ・コン	渡前農協・成沢久子, 全国大会出場
43	東京	アナ・コン	村山市農協・森谷美枝, 全国大会出場
44	東京	アナ・コン	山形県農協・伊豆田幸子, 全国大会出場
		番組・コン	神町農協「リンゴにかける青春」, 白鷹農協「夜のお知らせ」全国大会出場
45	東京	アナ・コン	村山市農協・工藤とし子, 全国大会出場
		番組・コン	山形農協「生活技術競技大会」全国大会で優秀賞
46	東京	アナ・コン	山形農協・海藤美枝, 全国大会出場
		番組・コン	朝日農協「朝のおしらせ」全国大会出場, 豊田農協「アメリカヒロントリの発生」全国大会で優秀賞
47	東京	アナ・コン	羽黒町農協・五十嵐ひで, 全国大会出場
48	東京	アナ・コン	上山西郷農協・舟腰計子, 全国大会出場
		番組・コン	村山市農協「山ばと民宿を訪ねて」全国大会出場
49	東京	番組・コン	朝日農協「大平に生きる」全国大会出場
		アナ・コン	羽黒町農協・鈴木恵子, 全国大会優賞

揮し、優勝をめざして真剣に競い合った。内陸地区予選、庄内地区予選、県大会、東北大会、全国大会へと選り抜かれて栄冠に輝いた人や農協もあれば、今度こそはと、さらに努力を重ね続けた人も多かった。

毎年の地区予選、県大会の様子は残念ながら割愛し、東北大会・全国大会で活躍した有放アナウンサーと農協だけを表Ⅲ-94にかかげる。

3) 有放施設の後退

普及拡大する電話、増加する出稼ぎ、兼業化は有放施設に大きな影響を与え、有放を設置した農

協は、逐年、有放をやめるようになっていった。

昭和40年には、67施設もあったが、49年には46施設に減少した。どの農家も生産にいそしみ、農閑期も村にあって農業や生活を語り合った時代の有放は、農村社会のなかですばらしい役割を果たしたが、それが米の減反後、40年代末期には、老人と子供しかいない農家に向けての有放は有効でないという状況に一変した。

しかしながら、食糧不足、経済不況の色が濃くなるにつれて、農業見直しが抬頭しはじめ、専業農家率こそ6.7%に落ちたが、第一種兼業がまだ48%と大きく維持している本県農業の実態のなかで、農協運動の武器としての広報機能の重要性は失なわれていない。むしろ高まらねばならないとして県農協大会は、総会3か年計画推進決議のなかで広報活動の徹底を採択した。

4) 目でみる情報農協機関紙

有放が耳で大きく情報とするなら、機関紙は目でみる情報といえる。農協機関紙としてある程度まで出揃ったのは、およそ30年代の中ごろからである。中央会は、機関紙活用の意義、編集技術の研修、機関紙発行統計、コンクールの開催などに取り組むようになった。しかし、30年代後半の県内農協の機関誌は、発行部数、発行回数、印刷、体裁、担当者数などきわめて多種多様であった。

農協合併によって機関誌発行組合の機関誌内容も変わった。全県の約半数組合が機関紙を発行していた。発行回数は、年3回程度が県内農協の3分の1、隔月が3分の1、毎月が3分の1というように集約されてきた。体裁はB5版が大部分を占めるようになり、印刷は活版が圧倒的となった。部数、予算、担当者数は農協規模の大きさにほぼ比例した。

農協合併により、「組合員は遠ざかる」とよく聞かれる。その距離を縮めるためにも機関紙ばかりでなく、広報機能はもっと拡大充実さるべきであろうが、教育広報はすぐ効果が現われにくいことから、農協自ら遠ざけるきらいがあった。組合員の心をとらえずに組合は何をとらえるのであろうか。定期発行組合はまだ半数である。

広報担当者が兼務で、編集委員会もない。それがないので担当者の独走になる。だから編集はマンネリになる。農協からの一方通行記事になる。各部から編集委員を出しても各部とも業務に追われ、結局、広報担当者だけになる。担当者は1人しかいなかったり、しかも兼務だったりするので「時間がなく、内容が充実しない。締め切りがおくれる」などの悩みに包まれていることが多い。こんな悩みをもちながらも、いつも県農協機関誌コンクールに参加し、あるいは機関紙研修会で研修を積み、組合員に喜ばれる機関紙づくりに専念する担当者も少なくない。その努力は高く評価されなければならない。そのなかから全国コンクールで入賞した機関紙もある。

〔県コンクールにいつも参加する機関紙〕立川の「農協ニュース」「白鷹農協だより」「農協よねざわ」「山形農協だより」「南陽市農協だより」「河北町農協だより」(40年、全国第5位入賞)、「農協かわにし」「やしろ農協だより」「さかた農協」「広報あまめ農協」「村山市農協だより」(47年度全国優秀機関紙入選)、「農協たかはた」「農協あさひ」「農協あつみ」「農協ゆざ」「はぐる農協」「ふじしま農協」「農協みかわ」「酒田市農協」「農協くしびき」「松山町農協だより」「天童市農協だより」等、発行46組合。

立川農協8ミリ映画「農協ニュース第三号」(東北代表となり40年度全国コンクール佳作入選)。

5) 家の光文化活動

「家の光」の歴史は古く、大正14年に産業組合中央会によって創刊された。以来、産業組合、農業会、農協へとうけつがれ半世紀にわたって農家の良き伴侶として育ってきた。創刊当時2万部、昭和10年100万部、農業団体統合が行なわれた昭和18年には150万部に達した。しかしながら、戦中、戦後に続いた用紙の配給統制により、昭和22年には、25万部に減少した。戦後という言葉が遠ざかった36年の新年号は、最高の発行部数となり180万部に達した。

本県の普及部数は、昭和24年に1万3,249部と東北随一の実績を示した。婦人部員達は、26年に作られた「そよ風に、そよ風にやさしく香るくろ土を……」の農協婦人部の歌を愛唱しながら、協同の精神を「家の光」に託して農協強化をすすめた。36年には、4万3,658部に達し、2.4戸に1冊の普及だった。北海道、福島に次ぐ全国第三位の普及率であった。

だが、その後は減少の一途をたどることになる。それは、農村人口の減少、テレビの普及、週刊誌などの影響があったからである。41年には、36年よりも1万部減って3万4,543部になり、49年には、2万6,380部となり最高だった35年に比べて半減した。

〔「家の光」家計簿記帳運動〕「家の光」の家計簿は、主婦達が好んで記帳しつづけてきた。アカギレ、しもやけの手をかばいながら家計に苦闘してきた歴史がそこにある。「家の光」が家計簿を発行したのは昭和28年だった。「家の光」臨時増刊号「久美愛家計簿」として30万部が発行された。「久美愛」の文字は産組時代を偲ばせる先輩組合員達のなじみ深い文字である。30年からは「家の光家計簿」に改まった。そのころは紙質が悪く苦情がずい分と出た。その後、紙質もよくなり、36年用からは残高式、多桁式の二本建となった。さらに付録になってからは多桁式に統一され、日記兼用となった。

婦人部の記帳運動と相まって、40年からは記帳指導と中間決算の仕方を指導する「家計簿教室」が文化事業の一つとなった。さらに、家の光地方講師による「家の光生活教室」が36年からはじまり、衣・食・住作法、美容などをその内容とした。婦人部活動のなかに取り入れられ即農協の生活活動の一環となった。中央会が中心となって各連もそれぞれの立場で参加した。45年当時の家計簿を指導している農協は85%という高率を示し、48年にはさらに高まって91%になった。

〔読書会〕戦後の農村読書会運動は、23年、農協の設立と同時に始まった。11月の半ばから12月の半ばにかけて、農村に関係の深い記念日が続く。11月19日、農協法公布記念日、11月23日の農地改革記念日、12月9日の農民解放指令の日、12月15日の農協法施行記念日というぐあいである。この時期は、灯火親しむ読書シーズンなので、県下どの農村でも何かしかの催しが行なわれた。

全国的には、家の光協会が「農村読書運動」を打ちだしたのもこのころである。以来、盛衰の波はあったが、今日もお読書会は続いている。「家の光」「地上」をもちよって、詩や小説の一節とか米価運動の経過の一部とか、生産・生活・農協事業記事、先覚者のプロフィールなど輪番で読み、お茶をすすり漬物をかじりながら読後の感想を出し合って話しがひろがっていく。そして明日への活力となる。読書会指導を行なった農協では、総農協数の41年には27%、45年には43%、48年

表Ⅲ-95 本県の三誌年度別部数

年	誌名	家の光	地上	こどもの光
昭35年		44,372	2,243	—
36		43,658	2,232	—
37		42,515	2,043	—
38		43,534	1,697	—
39		37,952	2,295	5,838
40		35,227	1,829	5,149
41		34,543	1,882	4,428
42		34,731	1,899	2,949
43		34,833	1,982	2,464
44		35,389	2,083	2,328
45		34,476	2,068	2,013
46		32,684	2,136	1,711
47		29,458	1,977	1,380
48		27,529	1,894	1,330
49		26,380	2,127	1,047

〔注〕 中央会。数字は各年次とも5月号

は THE CHIJO と改めた。こんな記録が残っている。創刊号は2万部で、そのうち山形県は400部の普及だった。青年部組織の拡大に伴って部数は次第に伸びていった。

28年5月、栃木県鬼怒川温泉で開かれた全国青年部代表者全国協議会のいわゆる「鬼怒川5原則」の確立、29年「山脈のみどりを越えて、新しきひかりは来る……」の農協青年の歌の制定、32年からの「農協刷新拡充3か年計画運動」を契機に、農協教育活動が強化され、36年には全国5万6,000部、本県2,232部の普及となった。

「家の光」が36年をピークに、その後急減したのとちがい、「地上」は発行部数こそ少ないが、読者が比較的固定していてあまり周囲の影響に左右されず、本県でも2,000部程度を持続した。

婦人部は「家の光」、青年部は「地上」「日本農業新聞」を心の糧として農協運動をみがき上げてきたといってよい。ところが、高度経済成長、米の生産調整など一連の政治は、農業を極度に後退においこみ、かつての農村社会のすべてといってよいほどに、その変貌を余儀なくさせた。伝統に輝やく「家の光」は35年の半減となり、2,000部を維持してきた本県の「地上」は2,000部を割ってしまった。しかし「地上」にあっては49年度になって再び2,127部と逆転したことは、本県農業に若い力の抬頭が感ぜられる心強い現象といえる。

〔「こどもの光」誕生〕 39年、「家の光」から「こどもの光」が誕生した。「人間の性格志向が決定づけられるのは母のふところにある幼児の時代にあるという。幼年期の教育こそ大切である。協同精神を培い、あわせて社会連帯思想を育てる。農村の生活に夢と希望をもたせる」などの趣旨で、「こども家の光」が本誌綴じ込みになったのは、38年9月号からで、39年からは「こどもの光」という誌名で新発足した。

「家の光」購読農家百数十万戸のうち、7割ちかい家庭に小中学生がいることは明らかで、そのうち5分の1にも満たない家庭でしか「こどもの光」が読まれていないということは、農村教育の

には53%である。全県的には中央会が主催して

「家の光読書研究会」が連年実施されてきた。

読書会のほかに、家の光記事活用体験発表会が婦人部の目玉行事として毎年実施されてきた。

〔地上〕は青年向けの理論誌である。「地上」の名がつくまでには若干の経緯があった。

「前進」とか「大地」とか「地上」とかの誌名候補があったようだ。当時、占領下なので米軍司令部に提出するには英訳名もつけねばならぬことから「地上」には適訳がないとしてパールバックの名作「大地」そのままを借りて、GOOD-EARTH とした。そしてこの英名は創刊1周年をむかえる23年4月号まで続き、5月号以降

立場からみて問題であろう。本県は49年に1,000部と、39年の5分の1に減った実態にある。

6) テレビ「田園アルバム」と「お茶の間百科」など

家の光企画による農業番組が地方の民放とネットを組んだのは、昭和41年からである。番組をフィルムなどにとって、これを民放に流し、好きな時間に再放映する方法がとられた。本県では、42年から山形放送が庄経の提供で「田園アルバム」を放映した。視聴率が高く好評を博した。福島・岩手・広島・四国・関東などは各連の共同提供だったが、本県は、結果的に庄経だけの提供にとどまってしまったことは、系統組織のうえでも大きな問題をかかえていた。

しかし、44年4月から電波媒体については各連の共同放送として統一実施することとなり、テレビは「田園アルバム」(YBC, 30分番組, 毎週日曜日)と、その後、家の光協会が制作を開始した農産物PRの料理番組「クッキングサロン」(YTS, 15分番組, 毎週土曜日)の2本、ラジオは「朝の民謡」(YBC, 10分, 毎日)が共同放送され、広報活動の一翼を担っている。提供は各農業協同組合、中央会、各連合会。(50年4月から「田園アルバム」は「あすの大地に」と名称を変更、内容も消費者にもわかるよう衣替えし、カラー化された)。

またCMも家の光と全国中央会が共同制作した総合コマーシャルが使われ、協同組合のイメージアップをはかっている。

電波媒体については各連とも共同放送を行なうようになったが、印刷媒体についてはまだ個別対応の現状であって「県段階における総合情報センターの設置について農協広報委員会において検討を重ねてきたが、設置までにはいたらず、第二次総合3か年計画運動のなかでさらに検討をし、体制の整備をはかる必要がある」との県農協大会情勢報告の段階にとどまっているのが現状である。

7) 「日本農業新聞」

「日本農業新聞」の歴史は、昭和10年反産運動に反対して「中央産業組合新聞」の発行にはじまる。戦後、全国農業会新聞が解散して、全国新聞情報連の発足となり、「日本農業新聞」の発行を継承したのは23年8月であった。32年の全国農協大会で日刊体制確立を決議し、従来の週2回発行を、まず隔日発行に拡大し(33年4月)、さらに、日刊に拡大されたのは42年7月からであった。

本県では指導協会(中央会の前身)の時代から普及対象として農協青年部、実行組合長、農協役員を主眼に全農家に購読がすすめられてきた。その頃、週2回とはいいながら農業・農協に関する情報がまとめて提供されるものは、これ以外になかった。青年部活動にとってはうってつけのテキストであった。33年から隔日刊になってからは、農協青年部の拡充強化と併行して「日本農業新聞」はさらに伸びていった。婦人部は家の光大会を、青年部は農業新聞大会を、単位段階・地区段階・県段階で開催し、その普及拡大はもちろんのこと、農協運動のすべてについての組織・事業・農政課題に取り組んでいった。とくに米価問題と「日本農業新聞」は密着して運動のなかにとけこみ、米価運動がたたかわれた。

日刊になってからは、中央会に専任記者(小林)を設け、県内ブロックごとに単協の兼任記者を情報員として配置し、現場からの情報積み上げも行なわれるようになった。

第Ⅲ編 山形県農協運動の推移

しかし「日本農業新聞」もまた、減反のはじまる直前には8,300部(本県)、その前は1万部をかぞえていたが、48年8月では6,943部数に後退した。二次総3目標(51年)では、1万部に向けての復活・拡大が計画されている。